は歐洲に於ける支那研究の歴史を述べたもので、博學著者の如くして始めて出來る勞作であらう。歐洲人の支那に關する著述を丹念に列擧してあるので、一面支那外交史、支那近世風俗史に關する要書目錄としても利用出來る。この論文は嘗て東洋學報に連載されたものであるが、此に一箇所に纒めて見得るのは甚だ便利である。最近出版された石田幹之助氏の「歐人の支那研究」と併せ讀む可きものであらう。

「史學の性質及び任務」は史學者の立場から歴史觀を述べたものである。近頃哲學者や社會學者が色々なことを史學に要求するが、或は抽象的な議論に止まり、或は到底出來ないことを注文される。若しそれ何々史觀、歴史哲學の飜譯、飜案に至つては、その日本語からが我々には至極難解であつて、もう一度外國語に譯して貰はぬと理解出來ぬ向も少くない。その點に於て著者の史學觀は地上に足がついてゐるので安心して傾聽されるものであり、且實際史學の研究法に有益な助言を與へられる。博士が主張される所謂實用的な史學に就ては或は異論も出るでもあらうが、その緒論に述べられたことが、近刊三木清氏の「歴史哲學」の最初の一段落と期せずして符節を合する如く一致するのは面白い。そして兩者がこの一點で交つたきりで永遠に背馳して了ふのは我々に何を敎へるか。この外、史學史、史觀に關したものに、「劉知幾の歴史研究法」「王鳴盛の史學」「クロパトキンの史觀」「Emil Reich 氏の史學研究法」「希臘の二大史家」等を收む。何れも學、東西に亘る博學者のみから期待し得る卓說である。

博士の舊著「東邦近世史」は既に絶版となつて、坊間に異常な高價を呼んでゐる。天、博士に壽を假さず、「ドーソン蒙古史」を完成されなかつたのは誠に遺憾であつた。三田史學會に於ては引續き東邦近世史、蒙古史、歐洲最近政治史、政治論文集を刊行される計畫であるといふ。其際にはドーソン蒙古史續卷の原稿の出來た所までを整理追加されんことを希望する。

（三田史學會發行、定價金五圓）〔宮崎〕

●Y. Gordon Childe; *Skara Brae, a Pictish Village in Orkney*, London 1931.

The Aryans, The Dawn of European Civilization, The Danube in Prehistory, 等の著書によつてよく知られてゐるゴルドン・チャイルド教授の新著『スカラ・ブレー』は蘇格蘭の北端、オークニー島の海濱にある小さい村落遺跡の報告である。既に蘇格蘭の考古學會彙報に報告されたものであるが、それがいくらか變更されてこゝに單行本として出版された所以は實にこの遺跡が先史時代の日常生活を示す住居址として數少い遺跡の一であるからである。その年代の如何に拘らず、純然たる石器時代であつて、金屬器或は金屬器使用の痕迹をとゞめる遺物はない。最下層は動物の骨、貝殼、土器片等廢棄物の堆積のみで、建造物の遺址なく、第二層には石板石の家屋があり、第三層は廢棄された第二層の建物を地盤としてより發達した石造家

屋があり、第四層の最上層はも早や廢棄物の堆積層のみである。併し、遺物は各層に共通し、單一の民族が繼續して住んでゐたことには疑ひない。この遺跡の斷續せる遺物と砂の各層はその原因が風と砂とにあつたこと、またこゝの住民がこの風と砂とには始終惱まされてゐたことを物語る。廢棄物は壁外に拋り出され、砂は絶えず吹き寄せられて、村は段々と埋つて行つた。遂には家々を結ぶ狹い通路は掩はれて了つて、トンネルになつた。石板石を積んだ家は狹い通路で連絡されて第二期には少くとも四つの家があり、第三期には八つの家があつた。方形を基礎にした多少不規則な家々は石の扉を入つて中央に四角の爐があり、右手に男の寢床、左手に女の寢床、正面或はその他に小供の寢床と思はれる石の圍がある。また壁に嵌入した穴倉があり、貝を養ふ生簀の石圍がある。また廢棄物からその日の生活を思ふならば第一に彼等の主食物は牛肉、羊肉と貝（主としてぢんがさがひ）であつた。彼等は家畜の飼養で生計をたてゝゐた。鹿肉も食べたが、鹿角の少いところから見ると狩獵はあまり重要なものでなかつたと見える。鳥骨は至つて少く、魚類もあまり食べなかつた。海濱の部落であるにも拘らず明白なる漁具は發見されぬ。鯨の骨もあるが、定つた捕鯨を業としたとも思へない。昔にうち上げられた一二の鯨が遺物の鯨骨全部を供したらしい。穀物の栽培に就いては積極的な證據を缺く、磨り臼や磨り石の存在は最近までやつてゐたこの邊の風俗から考へて大麥を粉にしたことを暗示するが、以前の發掘者の云ふ

ところによれば臼の中及びその附近には魚骨が澤山にあつたさうである。凡ての新石器時代の社會の如くに自給自足的な生活をし、この土地のものでない、海外または他の文化圏のものは全くない。金屬器も冶金の道具もない。牛羊の骨やこの地方の岩石が自家用の凡ての材料である。蘇格蘭の鐵器時代に普通な紡績に關する器具が見付からない。毛皮が唯一の被服であり、骨針がその爲めの道具であつた。木材の少いこの地方は家具も殆んど石に變更された。燃料は泥炭、發火は赤鐵鑛と黑硅石を打ち合して作る。武器殊に鏃は全くない。家畜を打ち殺す爲めらしい奇異な道具があるのみである。土器は粗質の黑褐色土器で後期青銅時代のものに一致し、更にこの遺跡と青銅時代との數々の親緣によつて、この遺跡の年代を西紀前五百年よりは遡らしめない。また西紀二百年から八百年に亙つてこの地方に榮えた鐵器時代の砦また穴居の遺跡卽ち Brythonic culture とは全然趣を異にし、どうしてもそれより先行するものと認めざるを得ない。この Pre-Brythonic culture が Brythonic Kelts の侵入者によつて征服され、而もその後期卽ち西紀六百年以後に於いて兩者の混淆したものが、正しく "Picish" なのである。

本書は色んな方面から批評することが出來るであらう。だがいま我が國の考古學界と云ふことを念頭にして見ると、少くとも二つの點が注意される。卽ち遺跡の發掘報告と云ふものは科學的と云ふ名の下に殊更に生硬になり勝ちであるにも拘らず、本書の如く讀みつらくないのは先づ吾々の注意を惹くところで

ある。次ぎに今日では發掘報告と云へば感興のないものとして、あまりに機械的に取扱はれやうとしてゐる。零碎な斷片からも遺跡の復原を思ひ、一遺跡からもその文化全體、また他の文化との關係を考へようとする努力はあまり拂はれてゐない。本書はこの點に充分注意され、美事に實現されてゐる。具體的な復原の可否に就いてはなほ議論を免れないであらうが、その正しい態度だけは認めなければならぬ。斷片を斷片とし、記述の爲めの記述考古學となり了らうとしてゐる我が國の考古學界にはよい參考になるであらう。

本書は好評あるチャイルド教授の新石器時代の研究と云ふ點からばかりでなく代表的な發掘報告の一つの行き方を示すものとしても特筆に價する。

なほ本書には F. H. Bryce; *An Account of the Skara Brae Skeletons and their Probable Affinities.* S. Watson, *The Awin al Bones From Skara Brae,* の二文を附載してゐる。(pp. xiii, 208, pl. LX, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.)

〔水野〕

●Bibliotheca Orientalis der Asia Major.

所謂東洋學諸分科に關する新刊書籍、論文を集錄した、一の東洋學文獻目錄とも云ふ可きもので、東洋學者、圖書館、大學研究室等の參考材料として「アジア・マヨール」會社の刊行したものである。特に東洋各地(日本・支那 暹羅)に於て最近發表せられた東洋文化に關する諸論文、單行本の名を網羅するのに努力が拂はれてゐる。

第一部 Chinesische Zeitschriften und Bücher (三—一九頁)は奉天の W・フックス博士の集錄、第二部 Japanische Zeitschriften und Bücher (二〇—四〇頁)は東京の Das japanischdeutsche Kultur-Institut の報告に據るもので、共に一九三〇・三一の兩年發刊のものを列擧してあり、吾人に取つては別に目新しいものを見出す譯ではない。本誌(史林)に就ては第十六卷第四號(昨年十月號)の三論文の題目が載せられて居る。

尤も第二部に於ては必ず收載せられねばならぬと思はれるもので、脱漏して居るのも若干あるようで、特に我國に於ける東洋史學に關する貴重にして有意義なる諸研究が殆ど收錄せられて居ないのは遺憾である。例へば雜誌では、我國唯一の東洋學純學術誌「東洋學報」を脱し、又東方文化學院東京京都兩研究所より昨年中各々其一・二號を發表した「東方學報」の名も見當らない。單行本に至つては唯松井等氏東洋史精粹の一部のみを擧げ居るに過ぎないのは物足らないと云はざるを得ぬ。

第三部 Siamesische Neuerscheinungen(四一—四七頁)、第四部 Orientanlische Literatur (四八—六八頁)。吾人には、この附隨的の意味で加へられた第四部の歐文東洋學文獻(近東關係のものは除外されて居る)の報告の方が寧ろ有益なのである。此には去年及今年中に發表せられた東洋學關係の書籍論文の名が三百近く分類列擧されて居るので、歐米東洋學界の趨勢を知る上にも、又參考書を選ぶ上にも非常に便利である。(六八頁 Asia